

移動を表す複合動詞の多義性と経路の関係 —「舞い込む」を例として—

袁 曉 犇

キーワード: 複合動詞、多義性、経路の同定、語彙概念構造

要旨

本稿は「舞い込む」を例とし、日本語複合動詞の前項と後項による結合の仕方という語形成の観点から、移動を表す複合動詞の多義性について考察するものである。考察の結果、複合動詞におけるメタファーとしての意味はV1における項と移動の喪失に起因することを明らかにした。そして、項と移動を喪失したV1はV2との結合の中で複合動詞の語構造に影響を与え、それによって多義性を獲得できるようになること論証した。最後に本稿で提示したV1の変質がほかの移動を表す複合動詞の多義形成においても機能していることを検証した。

1. はじめに

本稿は、「舞い込む」を例とし、日本語複合動詞の前項(以下V1と略す)と後項(以下V2と略す)による結合の仕方という語形成の観点から、移動を表す複合動詞の多義性について考察するものである。

多義性の問題については、日本語学で長い研究の歴史を有している。また、認知言語学の分野でも注目されるトピックであり、国広(2005)や松本(2010)などでは焦点化やメタファーとメトニミーといった方法論によって、意味拡張に基づいた認知意味論の立場から説明されている。「舞い込む」には、辞書によれば、「①舞いながらはいりこむ②予期しない所へ、または予期しないものが、はいりこむ」(『岩波国語辞典第七版新版』、以下『岩波』と略称する)という二つの意味があるという。ここで、「舞い込む」における意味①から意味②にメタファーやメトニミーなどのような意味拡張があると捉えようとする、無理があるように思われる。

また、『岩波』によれば、「舞い込む」におけるV1「舞う」について、「①回るように飛ぶ(飛び散る)②舞を演ずる」という二つの意味があるという。そして、V2の「込む」については、『岩波』では自動詞の連用形に付いて「①中に入る②その状態をじっと続

ける③すっかりそうなる」という三つの意味があるという。しかし、複合動詞「舞い込む」の構成要素であるV1とV2それぞれの意味が複合動詞の語義にすべて反映されているわけではない。

本稿は、二つの動詞によってできる複合動詞の多義性を考える際、複合動詞のV1とV2による結合関係を視野に入れるべきであると考え。実際、「舞い込む」は構成要素にない「予期せぬ・思いがけずにやってくる」という特有の意味合いがあるからである。これまでの研究で、V1とV2の結合関係において、「他動性調和の原則」(影山1993)や「主語一致の原則」(松本1998)といったような制約は提案されている。これらの制約は統語的・意味的な側面から複合動詞の語形成に与える制約であると見なせる。しかし、このような制約は生成可能な複合動詞を作り上げていくためのものであり、複合動詞が形成されるまでの段階でV1とV2の結合によって生じてくる多義性との関わりについてはまだ十分に説明されていない。後に詳しく述べるが、本稿では複合動詞のV1とV2における経路、そしてその合成の仕方が複合動詞の多義性に関わっていると考える。V1とV2における経路の在り方、そして両者の構造上における合成は移動を意味する日本語複合動詞に特有の現象と捉えられ、複合動詞の多義性を理解するための新たな視点に繋がると考える。

本稿で用いる分析手法についてここで触れておく。語形成という観点、とりわけV1とV2の結合関係という立場から複合動詞が持つ多義性を考えるために、V1とV2がどのように結合されていくのかという過程の内部構造を詳しく考察する必要がある。これを明らかにするためには、語彙概念構造(以下LCSと略す)での分析が有効であると考え。影山(2010a:154)によると、LCSは認知や発想など母語話者の心の仕組みを明らかにすることにも繋がるという。LCSを利用することによって、複合動詞が持つ多義性が概念上で如何に形成されるかを明らかにし、さらに意味形成における認知的な仕組みを解明することが期待される。

残りの構成を次に示す。第二節では先行研究と問題点をまとめ、第三節では本稿の分析に使うLCSモデルを紹介し、LCSによる多義性の分析を行う。第四節では関連する諸現象を検討する。第五節では全体をまとめる。

2. 先行研究

複合動詞の多義性について、山口(2013)では以下の(1)と(2)のような二つのタイプのものがあると指摘している。本稿で扱う多義性は(1)に相当し、いわゆるメタ

ファー(比喩)によって生じるものである。(2)は自他動詞による多重構造の多義性であるため、本稿では立ち入らないことにする。

- (1)a. 壁を塗り替える。
b. 世界記録を塗り替える。

- (2)a. 温泉が噴き出す。
b. タバコの煙を噴き出す。

さらに、山口(2013)は(1)のメタファーには「刻み付ける」と「建て直す」のような二つのパターンが存在すると指摘している¹。山口(2013)に従って、それぞれの多義性を以下(3)と(4)に示す。

- (3)a. 名を刻み付ける(ほって、あとをつける)。
b. 印象を刻み付ける(しっかりと心にとどめておく)。
(4)a. 家を建て直す(いままでの建築物をこわして新しく建てる)。
b. 日本を建て直す(つぶれそうになった会社などを、もとどおりにする。再建する)。

(3b)のV1「刻む」は「刻みつける」と共通する格要素(印象)を持ち、しかも「刻む」にとっても(3b)の意味は(3a)のメタファーになっているという。これは複合動詞の構成要素の多義性が複合動詞に反映されるパターンである。(4)において、メタファーとしての意味(4b)は「建てる」や「直す」のいずれの構成要素から来たわけでもなく、(4a)の複合動詞「建て直す」自体により生じた多義性というパターンであるという。山口(2013)によって提案された分類は複合動詞の多義性を体系的に捉えるために参考になる。しかし、本稿ではV1とV2の結合関係によって生じる多義性もあると考え、これは山口(2013)の視点と異なる。

一語に複数の意味があることを別の観点からみる研究がある。影山(2013:30)では、以下(5)のような二種類の語彙的複合動詞が一語において存在すると述べている。

- (5)a. 急いで医務室に走り込んだ。
b. 大会を目前にして、選手達は走り込んだ(練習する)。

(5a)は「主題関係複合動詞」であり、これは従来でいう語彙的複合動詞の大部分に相当する。この場合、V1は様態を表し、V2は移動を表している。一方で(5b)は、V1が活動を表し、V2はV1が繰り返し行われるという多回性を表す「アスペクトの複合動詞」である。これは従来、語彙的複合動詞における補文関係類の複合動詞に相当する。

語彙的複合動詞に関する意味分類について本稿では深入りしないが、影山氏が挙げた例から、複合動詞の構成要素の性格や着点の二格が多義性とどう関係するかについてみていきたい。移動様態を表す(5a)では、V1とV2がそれぞれ本来の意味と項構造を有し、V2から「医務室」という物理移動の着点が必要される。一方、(5b)では、V1が手足の動きを表す様態から、「走ること」という事象に変わり、複合動詞全体が「練習する」ということを意味する。この場合、V2が「中に入る」という物理的な移動を表さず、V1が表す事象の在り方に対して補足的に機能している。そのため、着点の二格がV2から必要される必然性がない。(5)ではV1とV2の結合関係が統語的・意味的に違っており、さらにこの違いは着点を表す二格との共起関係から、複合動詞の意味構造、そして事象構造に反映されていると言える。したがって、本稿では複合動詞における構成要素の性格や移動における着点が移動を表す複合動詞の多義性につながる要因の一つとして考えられる。さらに、移動の事象構造においては、起点と中間経路といった概念もある。移動におけるこういった異なる概念が複合動詞の多義性にも関わっていると想定し、以降で詳しく考察する。

3. LCSによる「舞い込む」の多義性

「舞い込む」の多義性を調査していくと、共起する名詞句との関係から、以下三つのタイプがあることに気づく。

- (6) 蝶々 / 葉っぱが部屋に舞い込む。
- (7) 海外から、(彼の手元に) 仕事が舞い込む。
- (8) 幸運が舞い込む。

(6)は「舞い込む」の基本義であり、有生物(「蝶々」)あるいは無生物(「葉っぱ」)が主語にくる例である。(7)は抽象名詞と共起する例であり、メタファーとしての意味になる²。(8)はやや特別であり、この類のものはほとんど「幸運」や「幸せ」としか共起しない。辞書によっては、コロケーション的な用法と考えることもある(『日本語コロケーション辞典』p. 1072)。本稿では、主に(6)と(7)を対象としてLCSによる分析を行う。(8)についての分析は語レベル以上の問題であるため、記述することにしておく。

分析の詳細に入る前に、本稿で使うLCSのテンプレートを紹介する。LCSのテンプレートは以下の(9)で示した影山(2010b:103)のものを利用する。これは移動の全過程を含む、着点を取る移動動詞(例:行く、帰る、戻る、上がる)のLCSである。

漸進的な移動/変化 推移 静止

(9) [x MOVE_{[Route P₁ P₂ … P_k]] BECOME[[x BE AT - z]] (P_k=z)}

(9)は「漸進的な移動/変化」を表す事象と「静止」を表す事象を「推移」という意味関数によって合成した「達成事象」(Accomplishment)である。「漸進的な移動/変化」について、[MOVE]とそれに選択された経路[Route]によって表示されている。そして、[Route]の内実は[P₁ P₂ … P_k]によって規定されている。ここでの[P₁]、[P₁ P₂ …]、[P_k]はそれぞれ移動における起点、中間経路、着点を表す。そして、「推移」は[BECOME]によって表される。ただし、ここでの[BECOME]は影山(1996)に見られないものであり、「変化」ではないことに注意されたい。「静止」について、以下の(10a)のように到着した場所での滞在期間が明示できる場合、[BE]という状態述語が想定されるが、(10b)のように着点での静止状態を表現できない場合、BEが不在であるという。BEが想定される場合、[P_k]という地点で経路上の移動を終え、静止位置(z)と同定される(P_k=z)。

(10) a. 北海道に2,3日間行った。

b. *電車が駅に2分間着いた。

影山(2010b)によれば、(9)の読みとしては、移動物[x]が中間経路を、[P₁]という地点から[P₂]、…へと移動して[P_k]という地点で経路上の移動を終え、その地点[P_k]が最終的な静止位置[z]と同定されるという。これをもって一つの移動事象において、着点まで含む最大の射程をLCS上で想定することができるようになる。物理的な移動を成す「舞い込む」の基本義において、構成する動詞がそれぞれ移動の意味を含意するため、(9)のテンプレートが適用されると考える。したがって、影山氏のLCSモデルを利用し、次節では構成要素の動詞から、どのような過程を経て複合動詞の多義性が生じるかについて述べる。

3-1. 有生物と無生物を主語とする「舞い込む」

この節では、「舞い込む」の基本義について考察する。考察の手順としてはV1とV2の特徴を見てから、複合動詞のLCSを構築していく。まず、単一動詞の「舞う」について見ていきたい。以下の(11)から、単一動詞の「舞う」は起点を意味するカラ格と共起することが確認される³。また、(12)のようにヲ格の中間経路項と共起することも確認される。これは「舞う」のLCS上に起点と中間経路が含まれていると言える。

(11) 奏楽堂の窓から見える縦の木に目をやりながら、縦の枝から鶯が舞うのを見て、彼にはそれが音楽とリズムを合わせているように思われた。

(瀧井敬子著『漱石が聴いたベートーヴェン』)

(12) 空を舞うワシのシルエットだけが、私たちの頭上の空の高みに広がり、この風景の死のような静寂を破った。

(荒田洋ほか編『グラスノスチ』)

しかし、「舞う」が二格と共起する際に独自の特徴があるため、確認しておく必要がある。(9)のLCSを持つ移動動詞は移動の終点に着点があり、そのため以下の(13a)のような時間副詞「一時間で」と共起できる。しかし、(13b)が非文であることは、「舞う」と共起する二格は着点を意味していないことを示唆する。むしろ、この場合、(14a)のようにへ格と入れ替えられ、方向性を表す(14b)のへ格に近い。「舞う」における(11)から(13)の特徴を踏まえ、そのLCSを以下の(15)に示す。

(13)a. 1時間で家に帰った。

b. *1時間で空中に舞った。

(14)a. 花びらが空に(へ)舞う。

b. 台風が北へ向かっている。

(15) [x MOVE_{<MANNER>} [Route P₁ P₂^{<…>} P_n]]

(15)のLCSは基本的に(9)における「漸進的な移動/変化」の部分を取り出したLCSである。着点を「舞う」のLCSに取り組む必要がないため、(15)は(9)における[BECOME]以前の関数に纏められる。[x]は「舞う」の移動物を表す意味変数である。[x MOVE]は「舞う」の移動を表す。[MOVE]に下付きの[MANNER]は移動の様態を表す。[x MOVE]の移動に経路の[Route]を伴う。経路の詳細について、[P₁]は移動の起点であり、これは(11)と対応する。[P₂^{<…>}]は移動の中間経路を表し、(12)と対応する。「舞う」は着点を持たず、二格と共起する際に移動の方向性を表すため、移動の先に[P_n]で表示する。これは例(14a)と対応する。上付きの不等号の[<]は移動における連続的な過程を表しており、[P₁]、[P₂]、[P_n]を繋ぐことで、移動の方向性が表される。

続いて「込む」について考える。松本(2009:180)では、以下の(16)のようにV2の「込む」が移動における着点以外の移動経路の諸側面を指定できると指摘している。この指摘は「殴る」に移動の意味がないため、複合動詞に含意される移動の意味は「込む」に由来するものであると考えることによる。

(16) (表口から/裏口経由で)殴り込む。

同様な指摘は自動詞連用形に付く「込む」にも適応すると考える。このことから、「込む」のLCS上において、(9)における着点まで含む「漸進的な移動」を有すると考える。ただし、「舞い込む」の場合、以下の(17)が非文であるように、「込む」は(10a)と異なって、(10b)と同様に意味構造上での「静止」が想定されない。これらの観察をもとに、「込む」のLCSを以下の(18)のように設定する。

(17) *葉っぱが部屋に2,3日間舞い込んだ。

(18) [x MOVE_[Route P₁ P₂ … P_k]]

(18)における[P₁]、[P₁ P₂ …]、[P_k]はそれぞれ「込む」が持つ起点、中間経路、着点と対応する。

ここまで、「舞い込む」の構成要素を個別にみてきた。複合動詞を形成するためには、V1とV2の合成原理について説明する必要がある。影山(1993:132)は、V1が移動を表し、V2が着点を強調する働きをもつ「駆け込む」を取り上げ、複合動詞の合成について、V2の概念構造がV1のEvent項に代入されるという語形成のメカニズムを提案している。このメカニズムによって、V1とV2に代表される別々の事象が一つの事象にまとめられる。本稿では、影山(1993)に従って、複合動詞「舞い込む」の合成過程を以下(19)のように考え、合成過程を経た複合動詞のLCSを(20)のように示す。

(19) (蝶々/葉っぱが)舞い込む。

V1「舞う」: [Event x_i MOVE_{<MANNER>} [Route P₁ P₂ … P_n]]

+V2「込む」: [Event x_i MOVE [Route P₁ P₂ … P_k]]

→ [Event x_i MOVE_{<MANNER>} [Route P₁ P₂ … P_n]] AND [Event x_i MOVE [Route P₁ P₂ … P_k]]

→ [Event x_i MOVE_{<MANNER>} [Route P₁ P₂ … P_n]] AND [Event x_i MOVE [Route P₁ P₂ … P_k]]

(20) [x_i MOVE_{<MANNER>} [Route P₁ P₂ … (P_n) P_k]]

(19)では影山(1993)にならって、複合動詞の合成について、「V1 AND V2」といった並列構造の縮約操作を仮定することで、複合動詞全体が一つの事象にまとめられる。これは、LCS上において、V1とV2の変更[x]に同一指標の[i]を付加することによって実現される。また、V1とV2は[x MOVE]という共通の移動事象を有しているため、V2の概念構造がV1のEvent項に代入されることになると、実質上、V2における[x MOVE]の詳述である[Route]部分がV1の[Route]に代入されることになる。V2

の[Route]をV1に代入する際、V1とV2における $[P_1 \leftarrow P_2 \leftarrow \dots \leftarrow P_n]$ の共通部分が重なるようになり、かつ着点の $[P_k]$ はV2によって提供されることになる。(19)の合成過程を経た複合動詞のLCSは(20)になっており、これは「舞い込む」の基本義と対応する。(20)を基に、複合動詞がどのような過程を経てメタファーとしての意味になるかを次節で考察する。

3-2. 抽象名詞を主語とする「舞い込む」

この節では、「舞い込む」におけるメタファーとしての意味が、どのように形成されるかを語形成の観点から分析する。ここで、抽象名詞の代表として「仕事」を取り上げ、考察する。抽象名詞が主語になった場合、個々の単一動詞の意味が変質し、複合動詞特有の意味に生まれ変わる。この特徴を顕著に表しているのがV1の「舞う」である。これは以下の(21)のように、抽象名詞と共起する単一動詞としての「舞う」が存在しない。また当然であるが、以下の(22)のように、この場合、「舞う」は移動経路のヲ格や着点のニ格と共起することもできない。

(21) *仕事_が舞う。

(22) *仕事(知らせ/依頼)が空を/宙に舞う。

一方で、V2「込む」について、「*仕事_が込む」のように単独の形式では使えないが、これは「込む」が動詞の連用形に付いて複合語の形でしか用いられないからである。「込む」が意味する内部移動と類似する「入る」の場合、「仕事が入る」が問題なく言える。このことから、「込む」は項と移動を保持できると言える。つまり、抽象名詞と共起する際に、複合動詞における項と移動の喪失はV1にあると考えられる。項と移動の喪失はV1が変質した過程であると理解し、変質したV1をLCS上でどのように捉えるかは以下の図1を見られたい。

LCS1: [x MOVE_{<MANNER>} [Route P₁ ← P₂ ← … ← P_n]]



項と移動を失う

LCS1: [DO_{<MANNER: Flutter>}]

図1

図1では、V1「舞う」における項[x]と移動[MOVE]を失うことで、LCS上では、原始的な意味関数[DO]のみ残される。そして、もともと[MOVE]に物理的な様態[MANNER]が付いているが、[MOVE]から[DO]に変更されると同時に、「仕事_が舞

い込む」の語義に含まれるような、実質的な移動様態ではなく、イメージとした抽象的な移動様態となる。このような抽象的な移動様態を図1では[MANNER]の補充内容とし、斜字体の[Flutter]と書いて表示する。

そして、LCS1の変化は複合動詞の合成にも影響を与える。(19)では、V2の概念構造がV1のEvent項に代入されるメカニズムを有するが、LCS1が項と移動を失った結果、LCS2との合成に変化が起こる。この場合、複合動詞の合成過程を以下の(23)に示す。

(23) (仕事)が舞い込む

V1[舞う]: [Event DO<MANNER: Flutter>]
 +V2[込む]: [Event x MOVE[Route P₁'P₂'...P_k]]
 → [Event DO<MANNER: Flutter>] AND [Event x MOVE[Route P₁'P₂'...P_k]]
 → [Event x MOVE(DO)<MANNER: Flutter> [Route P₁'P₂'...P_k]]

(23)の合成において、LCS1は項と移動を持たないため、V2の概念構造をV1のEventに代入される場合、複合動詞の項と移動が全部V2によって提供される。そのため、ここでV1とV2の変項[x]を連結する[i]は不要となる。そして、V2の概念構造がV1に代入されることで、V1が持つ原始的な意味関数[DO]はV2の[MOVE]に統合されることになる。[DO]が[MOVE]と統合することに伴い、V1における[MANNER: Flutter]もV2の[MOVE]に統合されることになる。(23)の合成過程を経て、抽象名詞と共起する「舞い込む」のLCSを以下の(24)に表示する。

(24) [Event x MOVE<MANNER: Flutter> [Route P₁'P₂'...P_k]]

(24)は(20)に比べ、いくつか異なる点がある。まず、複合動詞における項と移動は全部V2によって提供される。V1は単にV2の移動に抽象的な様態[Flutter]を提供する。また、合成の仕方について、(20)ではV1とV2の移動が重なっており、[P₁'P₂'...]がV1とV2における共通部分としてLCSに反映される。一方で、(24)ではV1が移動を有しておらず、V2の持つ[P₁'P₂'...]と重なることがないため、共通する経路部分がLCS上に存在しない。このことから、(24)の意味構造は(20)に比べ、途中経路[P₁'P₂'...]の部分がLCS上に顕著に表れないことを意味する。(24)ではLCS上に顕著に表れない経路部分を網掛けして表示する。

(24)をもとに複合動詞が持つメタファーの意味がどのように生まれるかについて説明する。まず、抽象的な移動様態[Flutter]が(24)に取り入れられることで、もともと物理的移動を成す「舞い込む」に、[MOVE]の移動に対する質的な変化が生じ、抽象

化された移動概念に移り変わったと捉えられる。そして、この抽象化された移動概念は基本義から拡張されたものであり、様々な抽象名詞[x]と共起できるようになる。さらに、LCS上に顕著に表れない[P₁P₂“”]部分が、移動のスキームを理解するにあたって、欠如していることになる。つまり、「仕事が舞い込む」という移動は、物理的な移動概念から抽象化され、さらに、移動の全過程に焦点を当てず、着点に到着するという動作として解釈される。途中の過程を抜きに着点に現れることから、多義性にある「予期せぬ・思いがけず」の意味が生じる⁴。

ここでの移動概念における起点と中間経路の在り方が複合動詞「舞い込む」の語義における「意外性」の意味と関係することは、以下の例も参照されたい。

- (25) a. (どこを通ったか分からない)蝶々が舞い込んだ。
b. (差出人の分からない)手紙が舞い込んだ。

(25ab)は有(無)生物を主語とするタイプのものであるが、本来なら「意外性」が生じる必然性はないが、ここで中間経路と起点が文脈によって弱められることで「意外性」の含意が増す。ただし、(24)の構造を有する「仕事が舞い込む」の場合、起点と中間経路がLCSのデフォルト上において顕著に表れないものであるため、「意外性」がもともと含意されていると考える。

以上、この節では複合動詞「舞い込む」が抽象名詞と共起する際に、多義性が生まれる理由について説明した。纏めると、項と経路を喪失した「舞う」は変質した複合動詞のV1として理解され、V2との結合に変化が起り、新たな意味構造になり、多義性を持つようになる。

3-3. コロケーションとしての「舞い込む」

この節では、「幸運が舞い込む」のような例について触れておく。この用法はかなり限定されており、ほとんど「幸運」や「幸せ」のようなものとは共起しない。(26)のように運氣のようなものであれば、「不幸」を主語としても理屈上は可能であるが、「舞い込む」との座りが多少悪い⁵。これは「幸運が舞い込む」という類は狭い範囲での用法であることを示し、コロケーションの性格があると言えるわけである⁶。

- (26)?不幸が舞い込む。

コロケーションという言語単位は語レベル以上の現象と捉えられ、本稿で使用するLCSの分析を適用するのに限界がある。ただし、強いて(24)の構造と関連づけて言えば次のようになる。 (24)の構造上、起点と中間経路の概念はLCS上に顕著に表れ

ないが、(27a) (28a)のように文脈が揃えば、具現化することは可能である⁷。しかし、(27b) (28b)の場合、意図的に起点と中間経路を加えても、やはり文として不自然である。

(27) a. 海外から、仕事が舞い込んだ。

b. *神社から、幸運が舞い込んだ。

(28) a. 親会社経由で、仕事が舞い込んだ。

b. *知人経由で、幸運が舞い込んだ。

つまり、「幸運」が主語になった場合、(24)の構造における網掛けの起点と中間経路が存在しえないことになる。これは、抽象名詞「幸運」によって複合動詞に与えた変化と見なせる。この点について、「幸運」という抽象名詞は「仕事」などの名詞に比べ、特殊な名詞であるためと考えられる。このように抽象名詞「幸運」から複合動詞の内部構造に影響を及ぼす点において、前節とは異なる「舞い込む」の特殊な用法と言える。

4. 複合動詞の多義性と経路の在り方について

ここまで、「舞い込む」を例として、基本義から、メタファーとしての意味に拡張する過程を、LCSを利用して考察した。多義性を獲得できるようになるのは、変質した複合動詞のV1がV2との関わりの中で変化を起こしたことに起因すると考えられる。さらに、その結合関係をもとに、「舞い込む」における「意外性」の語義が現れると言える。多義性を分析する際に、個々の語における具体的な意味、あるいは意味拡張におけるプロセスについて、それぞれの語の性格や特徴が強い側面があるため、個別に記述する必要があるとされる。しかし、本稿で提起した図1のプロセスはその他の移動を表す複合動詞にも適用されると考える。これを以下の例から確認する⁸。

(29) a. 隙間から(部屋に)風が吹き込んで、寒い。

b. 伝統芸術に新しい命を吹き込む。

(30) a. 潜水夫が(水底から)水面に浮かび上がった。

b. 問題点が浮かび上がった。

(31) a. 岩壁を這い上る。

b. 人生のドン底から這い上る。

(29b)～(31b)における複合動詞のV1は、本稿で言う変質した複合動詞のV1として理解される。さらに、個別の意味を見ていくと、(29b)は(29a)にある起点が概念構造上で想定しにくい。(30b)は(30a)にある起点と中間経路が想定しにくい。(31b)は

(31a)にある中間経路が想定しにくい。複合動詞における個別の語義はどこまで経路と関係するかを個別に精査していく必要はあるが、複合動詞のV1が変質したことに応じて、V2との在り方に変化を生じさせている点において、「舞い込む」と類似すると思われ、やはり注目すべき現象である。

5. おわりに

日本語の移動を表す複合動詞の多義発生について、V1とV2の結合に理由があるのではないかという問題提起から、「舞い込む」を取り上げ、LCSの分析を通して、語形成の観点からその多義性がどのようにして生じたのかを考察した。考察を通し、次の2点が明らかになった。

1. 変質した複合動詞のV1がV2との関わりの中で、変化を起こし、複合動詞全体が多義性を獲得できるようになった。
2. 移動を表す複合動詞の意味はその経路の在り方によって変化する。

注

1. 山口氏は(3)と(4)のほかに「投げつける」のパターンがあると指摘し、これをV1の多義性が複合動詞に反映されているタイプと見なしている。しかし、「疑問/不満/皮肉を投げる」という用例がほとんどないため、山口氏はこれらについて、用例数が十分でなかった可能性があると考えている。本稿ではこの問題について、なぜ用例数が少ないのかという理由を考えることが重要であると捉え、3.2節で詳しく論証する。
2. その他に、「依頼」、「注文」、「督促状」、「情報」、「お知らせ」、「話」などが挙げられる。
3. (11)は「BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)」からの例である。また、以下の例文の出典が記載されているものはすべてBCCWJからの例である。
4. 複合動詞における「意外性」の語義について、同様な分析は「飛び込む」にも与えることが可能である。抽象名詞「仕事」と共起する例は以下を参照されたい。
例：ビーチ開放デモから一カ月も経たない九月二十七日、マリーのもとに思いがけない知らせが飛び込んでくる。(佐保美恵子「マリーの選択」)
しかし、「飛び込む」の場合、「意外性」のほかに、「勢いよく」という意味もある。これは、V1「飛ぶ」における[MANNER:Jump]の様態性と関係すると思われる。ただし、これを論じるためにはLCS以上の道具立てが必要になる。詳細な分析について今後の課題にしたい。
5. BCCWJで検索した結果、「舞い込む」は「幸運」との共起が見られるが、「不幸」と共起する用例が見当たらない。
6. 前節で述べたように「舞い込む」と共起する抽象名詞は[MANNER:Flutter]の様態性を持つ。この[Flutter]は通常軽いものの親和性が高い。Happy is upの比喩のように、幸運はいいものであるため、上にあるから、軽い性質を持つ。一方で、「不幸」は心理的に負担が重いものと理解されており、「舞い込む」が持つ様態性と共起しにくい。このように、「幸運」を対象とする場合、名詞的な意味・概念を介して複合動詞を説明するにはLCS以上のツール、例えば特質構造が想定される。詳細な分析は今後の課題にしたい。
7. しかし、起点、中間経路、着点を文脈上で全部揃えると、やはり「舞い込む」の文としては不自然である。例：「??海外から親会社経由で彼に仕事が舞い込んだ」。
8. (29)と(30)は国立国語研究所のサイトで公開している「複合動詞レキシコン」からの用例であり。ただし、括弧に入れた部分は筆者による追加である。(31)は作例である。

参考文献

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。

影山太郎(1996)『形態論と意味』くろしお出版。

影山太郎(2010a)「動詞の意味と統語構造」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座第1巻語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房, pp. 153 - 171.

影山太郎(2010b)「移動の距離とアスペクト限定」影山太郎(編)『レキシコンフォーラムNO. 5』ひつじ書房, pp. 99 - 135.

影山太郎(2013)「語彙的複合動詞の新体系」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて』くろしお出版, pp. 3 - 46.

松本 曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, pp. 37 - 8.

松本 曜(2009)「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の意味と文法』くろしお出版, pp. 175 - 194.

松本 曜(2010)「多義性とカテゴリー構造」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座第1巻語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房, pp. 23 - 43.

松本 曜(2011)「主語一致の原則と主体的移動を伴う事象を表す複合動詞」『国立国語研究所(NINJAL)共同研究発表会:日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』

国広哲弥(2005)「日本語多義動詞の構造」影山太郎(編)『レキシコンフォーラムNO. 1』ひつじ書房, pp. 25 - 45.

山口昌也(2013)「多義複合動詞の語義構造の分析」『第四回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 355 - 360.

由本陽子(2013)「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて』ひつじ書房, pp. 109 - 142.

Leonard, Talmy. (1991) "Path realization: A typology of event conflation." Proceedings of the 17th Annual Meeting of the BLS, pp. 480-519.

参考辞典

西尾 実、その他(2011)『岩波国語辞典第7版新版』岩波書店

姫野昌子(2012)監修『日本語コロケーション辞典』研究社